

泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 10 号

昭和 35 年 10 月

随 想

偶 感

順天堂大学教授 高 橋 博 元

泌尿器科紀要の巻頭に何か書けとの稲田教授の御命令なのでお引受はしたものの、既に諸先輩が如何様の事を述べて居られるかと、更めて一覽してみても大變裨益する処が大であつた。学問的の綜説、海外学会旅行記等から、降つては保険診療の問題、又泌尿器科を志す者の寡少なことに及ぶ迄、各種各様の問題が取上げられて居たが、私として身に滲みて感ぜられたのは泌尿器科を志す人が少数で、多くの方々が困惑して居られた事であつた。この事は私共の処でも矢張り大問題であり、同病者の多い事は一見心強い様にも思われるが、勿論それは近視眼的の考え方で、日本の泌尿器科全般としては大きな問題であり、創業期を漸く脱しつつある今日「守成難し」の古人の言が想記せられる次第である。殊に私が順天堂に赴任し同年配の外科、内科などの同僚と数年間同室したが、彼等の方は入局者も多いので組をつくり協同して仕事を行い成果を挙げているのを見聞し誠に羨望に絶えなかつた。反之私の方は入局者も少なく、全く其の日暮して殆んど診療のみに忙殺されて他を顧り見る余裕は全くないと云つて差支のない現状である。この打開策を考えても名案は仲々浮んでこない。

それにつけても思い出されるのは、或日講義を終つて教室を出ようとする一学生から、「泌尿器科は面白いですか」と質問を受け、「面白いとは何を指すのか」と反問すると、「儲かりますか」と重ねて問われ、教室でかかる言辭を聞こうとは全く予期もせぬことだし、又何たる無礼な質問かと憤慨もした。併し乍ら、国立大学に比較し多額の学費を必要とする私立の医科の学生としては、親の脛はそう長く嚙りたくないし、何とか既往の出費を早く回収し度いものと考え、折から卒業も間近い事とて一応は何科を専攻せんかと迷う時期でもあり、その参考にもせんものとしての質問かと好意的に解釈して怨すことにはしてみたものの、現代学生気質の一端を瞥見し何か釈然としないものがあつた。

一方私は大学を卒業後、病人を除き当時の青年が殆んど経験した軍隊生活に入り、終戦後引続き約1カ年国立病院に勤務してから母校で医局生活に入つたが、さして抵抗も感ぜず泌尿器科に進む様になつた。幸いに家も焼けず残り、途歩で通つて始めの1、2年は小遣に多少困惑したこともあつたが、やがて有給副手なるものが出来、泌尿器科は比較的人数も少くなかつたため末席を汚す様になり、小遣に窮することもなく、食と住とは充分に親の脛を嚙りつつ呑気に暮すことの出来たのは全く幸福であつた。ところが私の今日相手をしている学生諸君は両親の膝下を離れて上京している人が多く、又学費も以前に比して高騰し、従つて親の収入に比して負担が大であり、加之インターン生活がある等の不利な条件があるので経済問題が骨の髄迄滲透し切つている。或る意味では自立心が強いので結構な事の様であるが、他面こせつて悠然たる処がない様な印象である。従つて現在明らかに確乎たる地歩を占め

ている外科，内科，産婦人科等を志すものが多く，泌尿器科を始め2，3の臨牀科目や基礎教室を志望するものが少なく，又前述の如き質問の出るが如きことも，その原因の一端は此等の立場の相異に基づくものの如くであり，両者の間には可成りの相関関係が存在する模様である。

扱て前述の学生の質問に如何にして答うるべきか勘考した。勿論，儲けることが医の本質に悖るものであるか否かと云う基本的の問題を始め，今日の医療制度の是否，健康保険の医療給付の問題等の歪（これは我々医人が協力して常道に還元する様努力すべきは勿論である）を如何にすべきか等が関連しているものの，それらの問題はさて置き，泌尿器科のみを問題とするならば，先づ今日の泌尿器科は如何なる事を，如何なる密度で行い，如何なる特質があり，臨牀科目として如何に大切であるかを学生諸君に充分理解させる様に努めると共に，泌尿器科を専攻すれば将来如何に有望であるか，又有望となる見込であるかをも徹底理解せしめると同時に，これが実現に協力して努めなければならないと思う。

私は病院勤務の経験しかないが，中央検査設備の充実，麻酔科の新設等と相俟つて努力をすれば結構成果の挙がる様に感ぜられるし，又内科其の他の科と連絡を密にすると，可成りの数の興味ある症例は紹介されて来る。従つて数年前に比し入院患者数も，手術件数も又収入も概ね倍加する様になった。この様な事柄は場合によつては数字を挙げて説明するのも一法であると考え。

一方泌尿器科に現在関係している者としては，科の専門的特技が充分に評価せられる様，多くの方が主張する如く専門医制度の確立に向い，協同して邁進し，後輩が将来に希望をもたれる様にするために努力しなければならない。

結局大變抽象的の表現であるが，我々は泌尿器科全般の進歩のため協力して着実に前進の歩を進めると共に，後輩の希望の座の建設にも努めなければならない。併し乍らその成果の挙がるのは何年先と確言するのは困難である。となると，その成果の挙がる迄は如何にしたらよいか問題となる。

そこで唐突であるが，今日の医科の学生諸君に対し，私は次の様に懇望し度くなる。「諸君，出来るならもつと親の脛を噛る気になつて下さい。そして泌尿器科を始め，志望者難に苦しんでいる科目を専攻してみてください。塞翁の馬と云うこともありますよ」と。これは又何と云う虫のよい説であろうか。又親の脛噛りのお前は良い見本だとの御叱りを受けるのは勿論承知の上であるが，他面私の身から出た偽わらぬ告白であるかも知れない。